

報告

継続的な交流と省察を通じた“社会における個人”の理解の深化

岐阜大学医学教育開発研究センター 西城卓也

一般に、地域における多様な市民との交流は、低学年の医学生への医療を取り巻く視野を広げ、生活者の世界への理解を深め、学びの動機を刺激し、コミュニケーションスキルを向上させることが知られている。急速な近年の少子化・核家族化の中で、医学生が年齢や生活背景が異なる市民とのコミュニケーション経験が不足し、実習においても適切なコミュニケーションを取れないことが我が国では課題となっている。我々は、市民との継続的なコミュニケーション実習を通じ、如何なるプロセスで医学生がコミュニケーションを試み、社会における自己を理解するのか、そのプロセスを追い続けている。

岐阜大学医学部では、医学生一年生が6週間の地域体験実習に参加し、4つの施設に分かれ、毎週半日の実習を6週間行う。施設は、マタニティクリニックや、診療所、保育所とさまざまである。各施設でパートナーとペアになり様々な交流を図り、その交流を通じて、社会や自己の人生や存在について省察を促すのである。実習後は e-portfolio へ振り返りを記述し、教員からのコメントを得るようになっている。

彼らの学びには、大きく分けて2つのテーマが存在する。第一に、コミュニケーションにおけるクライアント中心性の理解である。すなわち、対話を通じて、自己の立ち位置のシフトを経験する。第二に、社会的存在としての繋がり・拡がりである。すなわち、交流を通じて、世界観・人生観の拡散と社会的存在としての自己認識を再形成するのである。またこれら二つのテーマは相互に影響しながら段階的に深化することも見逃せない点である。

本講演では、医学生が、様々な地域住民との継続的交流体験を通じて、コミュニケーションスキルや社会存在としての自己の理解を如何に深化させるのか議論したい。

[参考文献]

- ◇ 川上ちひろ、阿部恵子、藤崎和彦、丹羽雅之、鈴木康之. 保育園児・妊婦との継続的交流体験の教育効果: 医療系学生の気づきと学び. 日本小児科学会雑誌 2011; 115(1):132-137.
- ◇ Fujisaki K. Medical Education and Doctor-Patient Relationship in Japan. 164-182. In Eckart, W. U., & Jütte, R. (1989). Danielle Gourevitch, ed. Histoire de la médecine: Leçons méthodologiques. Paris: Ellipses.
- ◇ How can experience in clinical and community settings contribute to early medical education? A BEME systematic review.2006.28.(1).3-18.

[略歴]

岩手県盛岡市出身。平成11年日本大学医学部卒業後、国立病院機構東京医療センター総合内科の後期研修医・名古屋大学病院総合診療科外来医長・宮崎市豊栄クリニックでの職歴を経て、岐阜大学医学教育開発研究センターに講師として勤務。オランダのマーストリヒト大学医療教育修士課程を日本人で初めて卒業。現在は日本医学教育学会編集委員会・および教育研究開発委員会に所属。医学教育振興財団が、医学教育の奨励に貢献した若手の研究者に与える「懸田賞」を平成24年度受賞。